

写真「田んぼの生きものシリーズIII」  
マルタニシ

地域でのフィールド調査・研究の情報

## 琵琶湖地域の 田んぼ研究と 「水田生物研究会」

1990年代半ばまで、田んぼの生き物への関心はたいへん低く、米の生産に直結するイネ、有害雑草、害虫天敵以外はほとんど研究されていませんでした。当時、毒性が強い農薬の使用や圃場整備などのために、田んぼの生き物は現在よりも乏しかったようです。また、田んぼの生き物を生業複合の中で利用することも、ほとんどなくなっていました。ですから、田んぼの生き物への関心の低下は当然だったとも言えます。しかしその中でも、先駆的な何人かの研究者によって、水田地帯の生物多様性の諸相が少しずつ明らかにされてきました。

琵琶湖博物館では開館直前の1996年に、田んぼの総合研究を始めました。水田地帯の生物多様性を研究する先駆的な研究者たちの協力を得て、人と水田生態系のかかわりを広範に解明しようとしたのです。総合研究のメンバーの1人であった安室知氏（現 国立歴史民俗博物館）は、生活史の中で水田を利用する魚類を「水田魚類」、そのマイナー・サブシステムとしての漁獲を「水田漁撈」と名づけました。そして、水田魚類の生態や、遊びやオカズトリとしての水田漁撈の年代の変遷などが研究されました。この総合研究はわずか2年で打ち切れ、学術論文として出版された成果も多くありませんでした。しかし、水田をめぐる人と生物とのかか

わりを総合的に明らかにしようとした研究スタンスは、滋賀県内外のさまざまな田んぼ研究に影響を与えました。さらに滋賀県の環境政策、たとえば魚のゆりかご水田プロジェクトの契機ともなりました。

その後、2000年代に入ってから、専門家をはじめ多くの人たちが滋賀県の田んぼ研究にかかわるようになってきました。たとえば、琵琶湖博物館フィールドレポーターは、琵琶湖集水域の大型鯀脚類（田んぼのエビ類）の分布を詳細に調べ、北部の多雪地帯には分布が少ないことを明らかにしました。この研究を引き継いだ琵琶湖博物館はしかけ「田んぼの生き物調査グループ」は、カイエビが冬に土壌が湿る水田（湿田）にはあまり出現しないことも明らかにしました。

一方、様々な生き物の専門家が滋賀県の田んぼに集まることで、多くの新発見が得られつつあります。ミミズを例にとると、Robert J. Blakemore氏（現 漢陽大学）が滋賀県の水田地帯から3種の新種を記載しました。また日本最長のミミズ、ハツタミミズについては、谷口恵氏（滋賀県立大学）の調査などによって、琵琶湖周辺の水田の畔に広く分布するのみならず、内陸部でも湖成層の粘土



滋賀県の田んぼのエビ類（カブトエビ2種以外は秋山廣光氏撮影）

地帯にも一部生息していることがわかってきました。これまでハツタミズは石川県、滋賀県、福井県のそれぞれ限られた地域からしか知られていませんでしたので、琵琶湖集水域が最大の産地ということになります。

皆さんはイタチムシをご存知でしょうか？長さ0.1~0.2 mm ほどのたいへん小さな動物で、水中の泥や植物の表面付近で暮らしています。イタチムシはこれまでに日本から34種しか知られていません。ところが、鈴木隆仁氏（大阪大学）が大津市の水田で調査したところ、何と43種ものイタチムシが発見されたのです。この中には日本初記録のものが5種、新種と思われるものが少なくとも5種も含まれており、現在、慎重に記載を進めているところです。

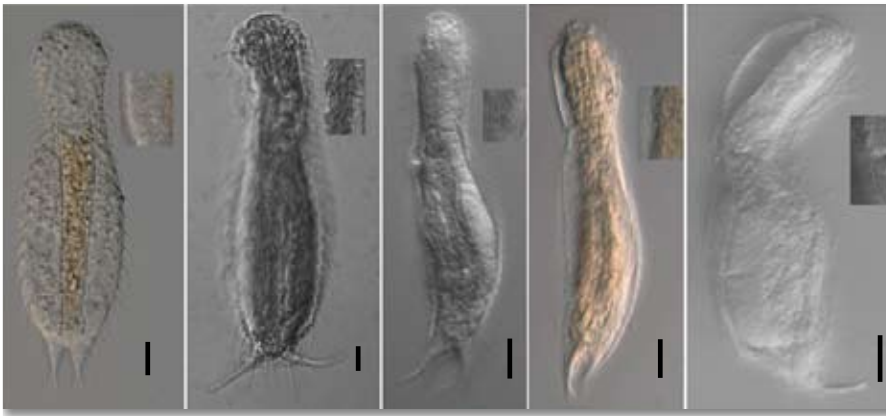


第1回 琵琶湖地域の水田生物研究会の様子  
(小鹿亨氏提供)

こうした田んぼの生き物の研究成果を集めて、琵琶湖博物館で「琵琶湖地域の水田生物研究会」を、2010年と2011年の2回開催しました。2010年は19題、2011年は27題（他地域からの招待講演を含む）もの発表が行われました。参加者は

各年とも120名ほど、農家、行政関係者、非政府組織職員、環境コンサルタント、職業研究者、アマチュア研究者、その他田んぼに興味を持つ様々な人たちでした。私たちは、田んぼの生き物を多くの人たちとともに調べ、さらに多くの人に知ってもらうことで、この地域の田んぼを良い形で次世代に引き継ぐことに貢献したいと考えています。

(専門学芸員 大塚泰介)



大津市の田んぼから見つかった日本新産のイタチムシ5種。  
スケールバーは10 μm (鈴木隆仁氏提供)

## どこでもだれでもフィールド情報

## 身近に居るムシのツブヤキ

私は小さい頃からムシが大好きでした。今でも休みの日ごとに近所でムシ採りをしています。年によって同じ時期なのにいたり、いなかったりといった事があり、いったいなぜなのか、興味はつきません。

採り集めたムシたちは友人を通じて、最終には博物館に収蔵されていますので、手元には採集した時撮った写真と、データのみ残されています。その中で、自分では、「これはおもしろい！」と思っているムシを紹介します。採集地はいずれも大津市内です。

①は零度以下でないと活動できない、という昆虫です。翅がなく、雪の上を歩いていました。手にのせて息を吹きかけると悶え苦しみました。

②は一時、生ける化石として名を馳せました。昆虫で直翅類に近い仲間です。発見者のフランスの外交官ガロア氏の名前がついています。



①クモガタガガンボの一種



②ガロアムシの一種



③カニムシの仲間、8種

③は昆虫ではありません。クモやダニに近い仲間です。専門に研究しておられる方によると新種がいるそうですが、まだ発表されていません。8種の内1種は琵琶湖博物館の敷地内でも棲息していました。

正式な和名が書けないのが残念なのですが、まだまだ名前についてないムシが身近に多くいることを、知ってほしいと思います。(私が知らないだけのものもありますが)

最後になぜ虫ではなくて、ムシとしたのかおわかりでしょうか？

(囑託職員 中川 優)

どこでもだれでもフィールド情報

## 滋賀のカヤネズミを求めて

カヤネズミという日本一小さいネズミがいます。どのくらい小さいかというと、大きさは親指くらい、重さは500円玉くらいの小さなネズミです。なぜそんなに小さいか、理由があります。カヤネズミはススキなどの細長い葉っぱを使って巣を作り、草の上で生活をしています。そのため、体は軽く、バランスを取りやすいようしっぽが長くなり、葉っぱから落ちないように足の指が物をつかめる形になり、草で肌が傷つかないように耳は小さく毛が生えて、草むら仕様の体に進化したネズミなのです。

カヤネズミがすむような草むらは利用価値がないため減ってきました。草むらは、刈取りなど人の手が入って維持される環境です。人の活動、生活のすぐ隣で生きてきたカヤネズミが、その環境の変化により数を減らしています。

カヤネズミは6月から11月頃まで子育ての時期に入ります。1m前後の草丈がないと巣を作れないため、夏の草刈りはカヤネズミにとって困った問題です。しかし、隣の草むらへ逃げる道があればカヤネズミは次の草むらを求めて移動します。一度に刈り過ぎない、連続した草の道がある、といったちょっとしたことがカヤネズミにとってはとても大切なことなのです。

私は、滋賀に来てまだ間もないですが、これから滋賀のカヤネズミを求めて草むら探検を続けていくつもりです。博物館の近くにもカヤネズミがすんでいます。カヤネズミと出会える、いのち豊かな草むらへご一緒しませんか。

(学芸員 澤邊久美子)



カヤネズミと巣

## 博物館と私の現在進行形

琵琶湖博物館と出合っではや10年。はしかけ活動などをするなかで、幾度か絵を描く機会に恵まれてきました。そのたびにこれまで気づかなかったことに気が向くようになり、様々な出会いの中で、多くの刺激を受け年を重ねてきたように思います。そしてこれまでイラストレーターを名乗ってきましたが、クリエイティブなイメージからどんどんかけ離れていく自分を感じています。

幼い頃から絵が好きで、絵ばかり描いているうちにすっかり勉強嫌いになっていましたが、博

物館で仕事をするようになって再び好きなことにはまっています。『壬申の乱』で誰れと誰れの戦いですか——お客様からのこんなひと言がきっかけでした。調べ出すうち教科書の中の出来事が急にリアルに動きはじめ、滋賀がとても好きになっていきました。それから自然信仰から森林へと興味は尽きず、そんな中“もりりん”の紙芝居制作を経て、さらに命あるものへの関心は高まり、現在進行形で歩み続けています。心が感じたものを描きたい。そう思うようになって感性的アンテナが少し伸びたような気がしています。そしてこれからどんな絵を描いていくのか自分でも楽しみなこの頃です。

(はしかけ 木村美枝)



もりりん2作目 只今制作中!



木々が緑色のイメージだった頃 → 個々の木に興味が出てきた頃 → 水や命を言ってるのを感じる今頃

イメージの変化



ツボカムリ

### 【資料裏話 その5】 殻のなかにいるのはだあれ？

水の中にすむ小さな生き物に、ツボカムリという有殻アメーバがあります。壺のような形の部分は砂粒などを固めて作った固い殻で、一見したところ、アメーバのイメージではないかもしれませんが、ですが狭まった壺の口からは、いかにもアメーバらしい透明な擬足（ぎそく）が見えます。微小生物は、そのままの姿で保存することが難しいものが多く、ツボカムリもアルコールの液浸標本にすると柔らかい部分が縮んで殻だけになってしまいます。ですから、生きている姿をとらえた写真は貴重な資料となります。(囑託職員 宮本知子)

#### ● 編集後記 ●

琵琶博だよりも発刊から3年目となり、今号からリニューアルをしました。文字のサイズや写真を大きくして見やすく、多くの情報を掲載出来るよう紙面を増やしました。これからも、眼にもやさしく心にもやさしい情報誌となるよう努めていきたいと思ひます。(てら)

#### 鳥の目 魚の目 クイズ

「子孫を残すために…」

田んぼで見かけるマルタニシ。さて、このマルタニシはどうやって子孫を残しているのでしょうか？

- ① 卵を泥の中に産みつける
- ② 小さなタニシが産まれてくる
- ③ 「えいっ!!」と二つに分裂する

答えは、紙面のどこかにあります。

#### ◆ 巻頭写真の説明 ◆

マルタニシは田んぼに生息している貝の仲間です。タニシの佃煮として食べられている多くはこのタニシです。かつては、田んぼでたくさん見かけましたが、農業や圃場整備の影響などによって減っており、滋賀県レッドデータブック2010年度版でも希少種になっています。